貞観の大噴火（864 年）

864 年（貞観 6 年）に発生した貞観の大噴火は、史上二回目の富士山の大噴火で、以後のどの噴火よりも壊滅的なものでした。当時の記録には、植物が燃え、岩が雨のように降り、湖が蒸気の音をたてる様子がありありと。富士山西面から流れ出した溶岩は、現在青木ヶ原樹海に覆われている広大な平原をつくりだし、石花海の大部分を埋めたてました。今日の西湖と精進湖は、かつて存在した巨大な湖の最後の名残です。

大噴火を受けて、朝廷は富士山の神である浅間神をなだめるため、甲斐国（現在の山梨県）に新たな神社を建立するよう命じました。浅間神はすでに富士山南側の駿河国（現在の静岡県）の神社で祀られていましたが、大噴火はこの神社が務めを怠っていた証拠と受け止めらました。

決定的な証拠は得られていないものの、今日の研究者は、この新しく造られた神社は河口湖の北岸に立つ現在の河口浅間神社の前身だったのではないかと考えています。その根拠に、この神社は富士山の山頂ではなく溶岩流の噴出口に向かって建てられています。これが、数百年後に毎年何千人もの一般人巡礼者を迎えることとなる富士山北麓の宗教的なインフラストラクチャーの始まりでした。